

副田先生と社会学研究室

奥山敏雄

副田先生に初めてお目にかかったのは、30年以上も前の4月1日、社会学の新任教員4人に辞令が交付された日であった。今から振り返れば、筑波大学が開学してそれほど長い時間が経っていなかった頃だ。これだけの規模の大学を新構想大学として作るわけだから、開学当初は西部の開拓時代さながらの空気に包まれていたと聞く。草創期の社会学はゼロからのスタートであったため、社会学の基盤を確立するための先生方のご苦労は想像を絶するものがある。副田先生は、その成果をもとに、社会学研究室内の基盤の拡充と制度化、さらには大学組織の制度化という点で大きな功績を残された。

当時の教育組織、教員組織はおそらく教員の意識のうえでは、いわば文学部の一学科にすぎない社会学が、法学部、経済学部とひとつ屋根の下にいるようなものだったのではないだろうか。社会科学とは経済学に他ならないと豪語する個性派もいるなかで、社会学が市民権を獲得するための努力は並大抵のことではなかったはずだ。つい以前まで学系会議で灰皿が飛んでいたなどという時期に、副田先生は社会科学系長として、法学、政治学、経済学の先生方との信頼関係を構築しつつ、噴出する問題の解決に尽力された。他の学問分野の先生方とのコミュニケーションの大切さをよく語られていたが、相互信頼に基づいて組織をまとめ上げていくみごとな手腕を実際たびたび目の当たりにしたのだった。それとともに社会学のプレゼンスが高まったことは言うまでもない。その後副田先生は、第一学群長、副学長を歴任され、大学規模でリーダーシップを発揮された。

筑波大学の社会学の基盤を拡充するために副田先生が腐心されたもう一つは、この大学ができるに至った歴史に関わる。東京教育大学の社会学には輝かしい歴史があるが、それが引き継がれることなく筑波大学が開学したことを、副田先生はたいへん気かけられ、社会学界における筑波大学のプレゼンスに常に気を配っておられた。日本社会学会大会を筑波大学で開催し、学会長であった森岡清美先生をお迎えすることができたことに、そして懇親会での会長のご挨拶のなかで、大会を引き受けるころまで筑波大学社会学が組織として成長したことを喜びに思い、今後も日本社会学の有力な砦のひとつとして、いっそう発展することを心から祈るというお言葉をいただいたことに、副田先生は胸をなでおろされていたようだ。森岡先生もつい先日ご逝去された。筑波大学社会学の歴史のひとつの時

期を画した学会大会の光景が思い起される。

こうした副田先生の功績は、とても細やかな気配りや努力によるところが大きいことは言うまでもないが、それ以上に、多くの人を惹き付ける先生のお人柄が格別であったからにはほかならない。当時「若手」と呼ばれていた教員たちは、毎月の定例会議の後にお酒を飲みながら先生を囲んでいろいろなお話を伺うことが楽しみだった。社会学という学問のこと、学会というコミュニティのこと、大学組織のことなどを、ときに笑いを誘う絶妙な表現でお話しされたが、そこには次世代に伝えたい先生の経験が込められていた。こうして副田先生の求心力のもとで社会学研究室としての共同性が構築されたのである。そしてそれが現在に至る社会学研究室の新たな伝統になっている。この良き伝統を次の世代に受け渡して行かねばならないと思うにつけ、副田先生の大きさがあらためて痛感されてならない。